高校３年、秋の運動会

この運動会を最後に女子のブルマ姿を見納めになった。

運動会終了後、体育委員のオレは体育倉庫に椅子やテントを片付ける作業をはじめた。

家に帰って、目の裏に焼き付けた女子のブルマ姿をオカズにすることだけが励みだった。

　下側室で運動靴に履き替えるときのブルマ姿

　準備体操のときのブルマ姿

応援に夢中になって立ち上がるブルマ姿

おしりに食い込んだブルマをなおすしぐさ

完璧に記憶し、思い出しただけで股間が反応した。

蒸し暑い体育倉庫に足を踏み入れると、同級生で同じ体育委員の桃野舞がいた。

美しい黒髪のボブカット、積極的な性格で成績優秀スポーツ万能の美少女であるにもかかわらず、

恋愛経験ゼロで校内校外に熱狂的なファンがいる。

もちろんオレは一年のときからベタ惚れで、毎日のオカズの第一候補だった。

「ちょっと田中君　このダンボール棚にのせるから踏み台もってきて」

「お…おう」

オレは内心ドギマギしながら、倉庫の隅にあった踏み台をセットした。

舞は無言で踏み台にのぼった。舞が踏み台の三段目までのぼるとちょうどオレの顔の前に舞のブルマのおしりがくる位置になった。

オレはチャンスとばかりに憧れのおしりを必死で凝視した。

ブルマはピッタリと形の良いおしりにフィットし、舞のスタイルの良さを強調していた。

「ねぇ田中君、私のおしり見ないでよ」

突然の舞の言葉に心臓が止まる思いがした。

「べ　…べつに見てねぇよ」

「うそ！今私のおしりじっと見てたじゃない。運動会の時も私の方ずっと見てたし、体育の時も私の後ろにならぶし、

１年の時から私のおしりばっかり見てたじゃない」

オレはついに憧れの女の子に嫌われたと思い冷や汗がでた。

「クスッ　田中君、思い出にエッチな事しちゃおっか？私のおしり好きだったら触ってもいいわよ」

目の前にあるおしりと舞の甘い言葉にオレの強がりは完全に崩壊した。

「ホ…ホントにいいの？」

「うん…田中君になら」

オレは震える手で舞のおしりに手を伸ばし、尻肉をゆっくり揉んだ。

はじめて感じる女の子のおしりの感触、しかも夢にまで見た舞のおしり、その感触はマシュマロのように柔らかく、

指が尻肉に面白いように食い込んでゆく。

「アン　…恥ずかしい」

舞はオレの激しい尻揉みに恍惚としている。オレは舞の甘い声に興奮が頂点に達した。

「ま…舞ちゃん…笑わない？」

「何？」

「舞ちゃんの…舞ちゃんのおしりの匂い嗅がせて欲しいんだ！」

「え？ん～　ちょっとだけなら…」

オレは両手で舞の腰を支え、舞のブルマのおしりに顔を近づけ、その割れ目に顔を押し付けた。

そして顔全体でおしりの感触を味わいながら、ゆっくりと匂いを吸い込んだ。

その瞬間、ブルマにしみ込んだ汗の匂い、土埃の匂い、そして中心部からのツンとしたフェロモンの匂いが鼻腔に満ち溢れた。

3年間思い続けていた舞のおしり、そのおしりを顔全体で味わいその匂いを楽しむ、まさに天国にも昇る心地だ。

「ヤン　恥ずかしい…おしり臭くない？」

「舞ちゃんのおしりすごくいい匂いだよ　舞ちゃん最後のお願いだ　このままオナラしてほしい」

「え？オナラ？そんなの恥ずかしいし臭いよ」

「頼む　オナラしてくれるまで離さないよ！」

「ちょっと待って、すぐでないよぉ」

オレはおしりに顔をうずめスンスンと匂いを嗅ぎながら舞のオナラを待った。

「アッ　オナラでるかも」

オレの鼻先に当たっているおしりの穴がヒクヒクしだした。そして

**プッ　プゥ**

舞のおしりの穴とオレの鼻の穴が直結状態で放たれたオナラは脳天を直撃した。

ついに憧れの舞のオナラを嗅ぐことができた。その匂いは卵とにんにくの腐った匂いだった。

オレはそのすばらしい匂いを必死に吸い込みながら短パンの中に射精した。

